

杉本暁史氏公開レッスン

2006年11月4日(土) / 14時～16時45分

会場 / 日本ダブルリード (新宿) 4F サロンにて
現在聴講者を募集しています。聴講料は1,000円です。

聴講ご希望の方はJDRもしくは直接森川までメールにてお申し込み下さい。

受講者と曲目

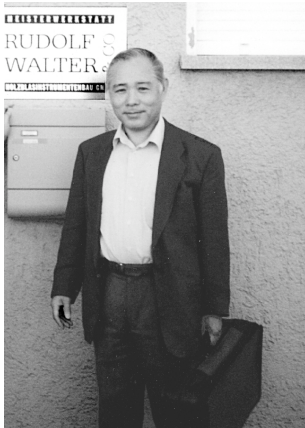
ベートーヴェン「クラリネットとファゴットの為の二重奏曲 第3番」
(Fg)山田祐理 (法政大学交響楽団/東京アマデウス管弦楽団)

グリンカ「ファゴットソナタ (ヴィオラソナタ断章による)」
(Fg)阿部憲一 (京都大学交響楽団/アンサンブルメゾン・東京アマデウス管弦楽団)

ウェーバー「ファゴット協奏曲 へ長調」
(Fg)江黒未希 (東京音楽大学卒業/フリー奏者)

プーランク「クラリネットとバソンの為のソナタ」
(Fg)辻 昭雄 (法政大学交響楽団/フライハイト交響楽団・東京アマデウス管弦楽団)

共演 (Cl)上田奈緒 (Pf)佐藤丹玲



ヴァルターの工房前で

杉本暁史氏略歴

杉本さんは、2004年末までドイツのウルム市立劇場の首席奏者を務められました。武蔵野音大を卒業後日本からファゴットで、戦後初めてウィーン留学され、音楽アカデミーでカール・エールベルガー氏に師事。その後ライムント劇場(ウィーン)、ダルムシュタット、アーヘン、アウクスブルクなどで劇場の首席奏者を歴任されました。まさにドイツで活躍する日本人奏者の先駆けとなられた方です。下記は定年退官にあたり「夢の目的地はウルムだった」と題され、新聞に載った記事のダイジェストです。

「このファゴットは音が大き過ぎる」と言うフリードリヒ・プライヤーの度々の怒声は、今も彼の耳に残っている。楽譜にフォルテとあっても音楽に合わなければ意味が無いからだ。プライヤー(1973～80/83～84)は歴代ウルム劇場指揮者で最も厳しい人だった。しかしプライヤーはクラリネットのレンナー、フルートのモタイそしてファゴットの杉本の3人を常に称えていた。

2005年に65歳(定年)になる杉本は、12月14日のJ.シュトラウスのオペレッタ「ベニスの夜」でボックスから退く。奇しくも彼の最初の仕事、それはウィーン・ライムント劇場の公演だったが、出し物はこの曲だった。こうした劇場での数多くの仕事を通じて、楽譜に記されていない多くの事を学んだと彼は言っている。少年の時オーケストラから聴こえる暖かい音色に魅せられ、ファゴットを手を取った。1964年にウィーンに留学。教授から「君がオーストリア人で無いのが残念だ」と言われた。当時外国人がウィーンで入団出来るオケは無かったからだ。そこでドイツに赴き、アーヘンを皮切りに最終的にドナウ河畔のウルムのオーケストラに落ち着いた。そして「文化は精神の汚れを落とす石鹸」との持論を実践すべく、1986年からアンサンブルを結成し夏休みを利用して帰国し生のコンサートを地方の人達に届けている。また杉本夫妻の日独文化交流活動に対する努力無しにウルムの少年少女合唱団、青少年ブラス、音楽院オーケストラの数度に渡る日本演奏旅行は考えられない。活動的な音楽家である杉本は、そう簡単に隠居生活に入る訳では無い。(2004,12.8 南西ブレッセ紙)

終了後、杉本さんを囲んでの懇親会を開きます。受講者と聴講者が対象です。音楽やファゴットそしてドイツの話などが聞ける楽しい会になると思います。是非御参加下さい。参考に私のホームページも御覧下さい。

森川メールアドレス & HP.

E-mail/heckelfg@infoseek.jp

http://www2u.biglobe.ne.jp/~heckelfg/